

第1学年 国語科 単元名「自分を見つめて」

教材名『印象深く思いを伝えよう』

1. 目標

- 身近な所から題材を探し、目的意識を持って作文を書き、感想を交流しようとしている。
【関心・意欲・態度】
- 文章構成や表現に工夫を持たせ、伝えたい場面や心情を効果的に書き表すことができる。
【書くこと】
- 様々な表現技法や正しい原稿用紙の使い方を理解している。
【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項】

2. 指導計画（8時間扱い）

見通す	①時	題材を探す…本教材のねらいと計画を知る。既習の物語等から工夫ある印象的な文章を見本として、題材を探す。
	②時	文章構成を練る…時間や場所、視点等に工夫を持たせられるよう構成を考える。
取り組む	③・④時	作品の下書きをする…前時に練った構成をもとに文章を書く。
	⑤時	表現技法を理解する…様々な表現技法を理解する。
振り返る	⑥時	表現技法の練習をする…前時に学んだ技法を用いて、短作文を書き、それを踏まえて自分の文章に生かしていく。 ←学び合いの例
	⑦時	作品を推敲し、清書する…正しい原稿用紙の使い方を理解し、よりよい表現かどうかをもう一度見直す。
	⑧時	読書会をする…他者の作品を読み、自分の作品と比較する中で、感想を述べ合う。

3. 第⑥時について

- 目標 ・他者の作品を推敲し合い、自分の作品に生かすことができる。【関心・意欲・態度】
- ・様々な表現技法を用いて、場面や心情が伝わる文章を目指す。【書くこと】

見通す	活動①	前時に学んだ「表現技法」を確認する。
	活動②	表現技法を用いることによって、文章が印象深く豊かになることを理解する。 例題の写真と文章から、よりよい文章を書くための手段を理解する。
取り組む	活動③	新たな写真で、表現技法を用いた文章の練習をする。各自で3枚の写真から1枚選び、表現技法を用いて200～400字程度の文章を書く。
	活動④	各自で推敲した後、小グループで作品を交換し、推敲し合う。 再度、各自で推敲する。 数名の作品を読み上げる。
振り返る	活動⑤	自分の本作品（下書き）を推敲する。
	活動⑥	本時の学習を振り返りながら、次時の内容を確認する。

4. 学び合いの例について

【活動③】：題材設定と用紙の工夫

(手だて)

①表現技法を確認する

前時に表現技法の名称と例を学習し、それらを知識として理解するだけでなく、活用できるように練習していく。そのために一度、振り返りをしてどのような技法があったかを全体で確認する。

②写真を選択できるようにし、興味・関心を抱かせる

生徒の実態は様々なので、写真はA：喜怒哀楽がわかりやすいもの、B：場面設定がしやすいもの、C：表情等が分かりにくいものの3枚を用意し、どれを選択しても良いとした。A⇒Cに従って難易度をあげているが、生徒は自身の経験・体験に基づいて物語を考えることもあり得るので、文章作成が苦手な生徒でもCを選択することがある。ちなみに、授業では、A⇒子どもがおもちゃを取られて怒っている写真、B⇒満開の桜がある公園の写真、C⇒自転車に乗る練習をしている親子(後ろ向き)の写真を挙げた。

③原稿用紙を工夫し、推敲を書き込めるようにする

従来の原稿用紙にも脇に言葉を書き込めるスペースはあるが、それよりももう少し幅の広い行で作成し、本文はマス目の行に書いていくようにする。また、作文の得手不得手もあるので、字数は200字～400字と設定し、例文で見本を示した。



【活動④】：グループ構成と活動の工夫

(手だて)

①グループの人数を4人にする

自分の表現が他者にも伝わるかどうか、他にどのような表現があるかを知るために、相互に作品を読み合う。その時、人数が5人以上だと時間もかかってしまうので、4人までが望ましい。また、グループの隊形も作品を読み合うだけなので、机の向きを変えるかどうかは生徒の実態によって考慮する。

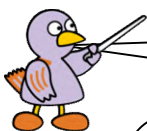
②推敲の方法を統一する

お互いに作品を交換し合う際、1：よいと思われる表現部には波線を引く。2：よくわからない部には傍線に？を付ける。3：他の表現に書き換えられる場合は右側に記す。という共通事項で推敲する。また、単に線を引くだけでなく、口頭でもどうしてこの表現がよかったのかなど、印を付けた部分の理由を伝え合ったり、表現で迷っている部分は質問したりする機会もとる。ここでの学習は、「練習」なので、今後の作品のために様々な意見を出せるよう促していく。



単元名「自分を見つめて」教材名『印象深く思いを伝えよう』

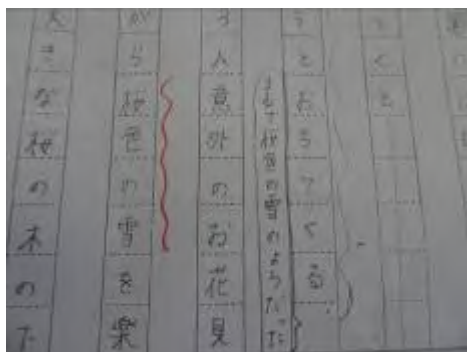
取組のワンポイントアドバイス



こうすればうまくいくよ！
実践にあたり工夫したところ・子供たちの変容の様子を教えます。

生徒の「興味・関心」を引きつけられるような題材を設定します。“作文”となると苦手意識を持つ生徒も多いので、生徒が身近に感じやすい題材を設定すると共にモデルを示します。また、文字数の範囲や、今回の作文では何が書けていけばよいのかも明確に示しておきます。また、モデルとなる作文もできるだけ教師も作成してみると、注意点などが把握しやすくなります。

用紙や教材も工夫します。従来の原稿用紙でも構いませんが、行間の余白スペースが狭いので、推敲をした際、書き込んだ文字が小さくなり見にくくなってしまいます。少し手間ですが、生徒の実態に応じて原稿用紙やワークシートなどもオリジナルのものに変えると、学習のしやすさにつながります。教材についても同じです。3枚の教材写真も、生徒の実態に応じてポイント(心情がわかりやすい、背景がわかりやすいなど)を絞るとよいと思われます。



小グループでの話し合い活動では、グループ編成を実態に応じて組み、活動内容を明確に指示します。今回の小グループは4人1組ですが、場合によっては3人1組で、組み合わせも学習状況に合わせて意図的に組んだ方がよい場合があります。また、活動内容も、どこに注目させ、何に対してどのように話し合うのかを事前に周知させます。○分まで話し合うという指示や、1つの作品毎に時間を区切る等で時間も明確にさせておくとよいでしょう。